サービスハウス通信

第 17 号
H24 年 5 月 10 日
発行
社会福祉法人東光会
サービスハウス 事務室
TEL084-941-5255

お花見

四月十二日の午後、坪生の東光園へお花見に行きました。
晴天にめぐまれ桜は満開でした。
皆で池の周りを一周してお茶とお菓子をいただいて帰路に着きました。

池を隔てて見る東光園の桜

皆で記念撮影です!

東光園側から見る桜

駐車場の桜並木

シベリアへ送られて　区

郡　誠司

＊ソ軍司令部＆第五ラーゲリ＊

第三ラーゲリにおいても作業現場が縮小されていたのは目に見えていたのでした。八月に入って間もない頃でした。日曜日というのに朝から騒然とした空気が漂っていたのです。本部から転属命令が出ていたのです。僕もその一人に入っていました。三年生活したねぐらを離れることになったのでした。急ぎ梱包を作り、衛門へと集まりました。総勢三〇名は居たと思います。

トラックの人となりエニセー川で台船に乗せられ対岸に着いた所が、クラスノヤルスク市だったのでした。第五ラーゲリは街とは言っても場末らしい所にありました。ソ軍司令部内に併設されて建っていたのです。第二ラーゲリの残留兵達が既に入っていたのでした。我々は壁面に沿って二段に造られた桟敷に、ねぐらが決まっていました。僕は上段に服部兵と隣り合わせに並ぶ事になったのでした。

このラーゲリには、朝鮮兵の一団が連れてこられていたのです。彼らは厨房を牛耳っていましたが、一部作業にも出ていたようです。厨房のスープ等は、「第三ラーゲリよりも、やや上回っているなあ」と食しながら感じ取っていました。黒パンには変わりなく、日本兵たちともトラブル等を起こしたことはなかったのです。

当地に来た時から、我々佐藤兵組の作業先は決まっていたようでした。コンバイン工場という農作業機械の大工場でした。勤務は昼夜二交替制になっていました。月曜日を振り出しに、日勤は通常八時間、一週間経過して、夜勤は月曜日振り出しに、夕の六時から夜中の二時に終わって帰って来ます。工場はレンガ造りの広い部屋がいくつもあってボール盤、旋盤、仕上げと区切られ油の臭いがプンプンと漂っていたのです。

初日、作業長室で個別に希望する機械を聞いていましたが大半は無難なボール盤に就き、僕たち七～八人は旋盤に就くことになったのです。

旋盤には、根っからのプロもいて大そう複雑な機械を扱っていました。他の人達は、一人ひとり違った旋盤機について加工する部品もすべて異なり、それぞれに加工する部品の専目ゲージが作られていました。これ等は部材管理室で掌握されていたのです。監督は、旋盤機毎に、「〇〇番のゲージをもらって来い」と言い加工品の旋盤工程を指導していたのです。加工品には責任があります。時折見回ってくるマダムが検査に来ますが真剣でしたよ。僕はシャフトの二段加工をしていましたが、バイトの研ぎ出しには苦労させられました。毎日同じシャフト削りして、四十日も通って来ましたが、ついぞ完成したコンバインを見ることはできなかったのでした。

＊ダモイ＆五，三〇〇キロの旅路＊

昭和二十三年（一九四八）九月二〇日、決定的な「ダモイ」が宣言されたのでした。「明日は明日の風が吹く」と言い続け、ただひたすらに待つことだけがすべてだったのでした。軍服を着た兵たちの心は躍っていました。すでに冬の服装で居りましたが、一人ひとりソ連軍将校が上から下まで目を通し、ソ連製ではありましたが新品が給付されたのでした。

僕には、「外套と軍用革靴を替えろ」と言われたのでした。外套は綿入れの防寒外套、靴は上等の革靴が支給され、これでみすぼらしさから抜け出せたのです。

所持品の入れ物は一個と限定され、僕の背嚢は何も持たない沖兵に譲ってやりました。午後から広場でバザールが開かれ「現金を持っているものは全部使ってしまえ。」でしたよ。隣に寝る服部兵は金持ちでしたね。バザールから戻ると僕に「これだけあれば良かろう」と言ってタバコ五箱を買ってきてくれました。こんな嬉しいことはありません。涙のにじむ感謝でした。明日はいよいよクラスノヤルスクとも別れることになります。今夜はくつろいで寝られるでしょうよ。

十月二十一日、いよいよこの地を離れる日になりました。午後になって第三ラーゲリの残留兵が集まって来たのです。同じ中隊にいた兵達とも再会できダモイを喜びあったのでした。

全兵が集合して閉所式が行われ、クラスノヤルスク駅へ大行進が始まったのでした。現地の人達は「ヤポンスキーがとうとう帰るのか」という表情で眺めていたようです。

駅へ着いてみますとレンガ色をした木造貨物列車が長蛇の連結をしてホームに待機して居りました。各車両の前には兵たちが整列をして待っています。一車両に三〇名前後乗っていたと思います。順次人員点呼を受け僕らの車両の前に来ますと、おなじみのソ軍司令部の美人カピタン（将校）が通訳の猿渡兵を伴って人員点呼を済ませたのです。

乗車です！　上下桟敷へ思い思いに座を取り、もう二度と、この街へ降りることはありません。全兵の乗車が終わったようです。列車がガタガタと揺らいだと思ったら滑るようにして出て行くのでした。車両の上段四隅の小さな窓からは何個かの目が無言に走り去る街を眺めていたのです。エニセー川の鉄橋を渡り第三ラーゲリを横目に見ながら驀進をつづけています。

この列車には、中央に厨房車が連結され出発その日から給食が始められていたのでした。夕景近く最初に停まった駅で各車両から受領に走っ

ていたと思いますが、詳しくは思い出せません。温かいスープと乾燥パンが、毎日同じでしたが一日三食は保証されていました。

夕食が終わりますと、貨車の四隅の窓も早くから締めますから、車両は暗くなってしまいます。集結地ナホトカまで、野鳥のようになるのでした。目が見えなくなると眠り、夜が明けると給食を待つのでした。板張りの床に、外套をきたままゴロ寝でしたから、夜更けには気温が下がり冷気が容赦なく忍び込んでどちらに身体を丸めてみても寒く、今はシベリヤのど真ん中だと思い知らされました。

列車は都市駅へ来ると機関車は給水をし、石炭を補給して長い時間停車していました。駅名などは知るのも不可能でしたが、停車する駅の数は多くあったと思います。出発地からのキロ数を調べてみましょう。もっとも重要になるハバロフスクまで四，四二七㎞、ナホトカ迄が五，三四二㎞になっていました。

沿線の描写については、大半が森林地帯を走り続け、視界が広がると都市駅に着いているという繰り返しですから省略させていただきました。食べることと便通は、命脈あるものの生理作用でしたから、機関車の貯炭と給水時間に合わせて青天井の野外へと走り出していたのです。

一〇月一日、ようやくハバロフスクへ到着でした。しかも深夜の停車でしたし、長いこと停まったままでした。この地を通過することが、ひとつの関門であるとは言っていましたが、心なしか不審な空気が漂っています。列車本部の通訳の声がしています。我々の車両まで来ると、車内へ向けて三名が呼ばれ「装具を持って直ちに下車してください」と言って、また次の車両へと消えて行ったのです。お互い顔の見えない中で「お元気で」「さようなら」短い言葉を交わすと彼等は手探りに車両を離れ消えてしまったのでした。車内に残る兵たちはほっとした気分になっていたに違いありません。長い時間が過ぎてやっと列車が動き出したのでした。

車内のヒソヒソ話によると特務員と警官だったようです。ハバロフスクを過ぎると一〇月二日の夜も過ぎ南下していました。今度停まったら集結地ナホトカであります。到着はまたも深夜でした。下車用意で降りますと砂地のようでした。潮騒の香りがしています。十一日間の長い旅路も終わり夜が明けて見ますとそこは砂浜でした。ここでアイウオ順に姓名の編成があり乗船待機に入ったのでした。ナホトカ迄を終わります。

第二部　シベリヤから帰った男

乗船待機から四日目です。ナホトカ港の岸壁にアイウエオ順で並んでいたのでした。沖の方に黒い船影が見えてきました。徐々に近寄って来るとハッキリと船体が確認できたのです。運が良いことに船腹に赤十字を記した病院船でした。高砂丸といって、台湾航路に就航していた客船だったのでした。

接岸が終わり、タラップが下されると、タラップの上り口にソ連軍将校が三～四人居り、一人が順次「青木」「赤城」と呼べば「ハイ」の返事も元気よくタラップを上がって行きます。「コ行」に来ると「ゴオリセイジ」と呼ばれ「はい」です。郡の姓名を呼ばれ、タラップに足をかけるやここで「シベリヤとの別れ、二度と来るまいぞ」甲板には大勢の看護婦たちが並んで口々に「お帰りなさい」と言ってくれる。この甲板で日本の女性と接した嬉しさは隠せなかったのです。

乗船者達は、各々の船室に案内されて行きました。乗船が終わると、即、出航でしたが誰一人として甲板で手を振っている者は居りませんでした。

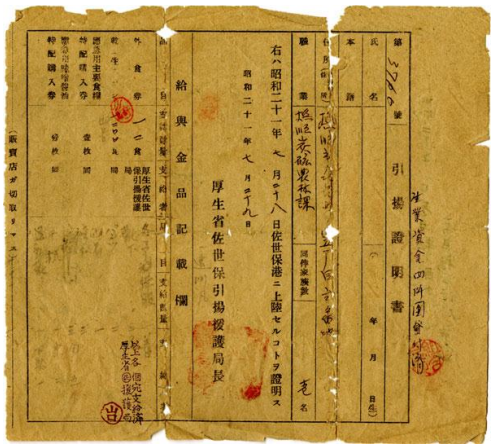
「コ行」の船室は最後尾でした。少ない人数でしたよ。多いと思われた小林姓は第二便に廻されていたのでした。出航後間もなくして夕食が配られて来ました。日本米に海草の混った炊き込みご飯でした。割り箸が付いています。今の我々は、何もかも珍しかったのです。食事が終わってしばらくすると、引き揚げ援護局の人が鉛筆と用紙を持って来ました。簡単な履歴書ですか、それに必ず書けと言ったのが知る限りの戦友の死亡者名を思い出す事でした。

夜も更けてきました。海は荒れ模様のようです。船は揺れていました。僕も船酔いになっていましたよ。一昼夜の朝ぼらけ、日本沿岸の漁船の灯がチラチラと目に映ってきました。乗船の看護婦たちも甲板に出て酔いを醒ましていましたが、僕との会話です。「おはようございます。」「この辺りはどこでしょうか？」暗闇は白々と明けて舞鶴港に入ったようでした。そこ、ここに爆撃で沈没した船舶が頭を残す中、やがて高砂丸は停船してしまい、小さな連絡船に乗り換えて上陸、日本への第一歩を踏みしめたのでした。（昭和二十三年十月十三日）

朝の太陽が頭上に輝いていました。そこには駅の改札口が作られ、そこを通過する男たちは両腕を捲り上げ、両側にいる看護婦からヨーチンを持ってサッと拭われ、さらに前へ進んで予防注射の針のプスッと攻めに会い、上陸第一歩を記す証明でもあったのでした。次の関所は税関検査でした。格納庫らしき広い建物に入ると一メートル四角の台上に四桁数字が記され、五〇〇、八〇〇とあったでしょうか、一人一人の所持品を並べて番号を覚えておきます。これから浴場に向かいます。健康検査が終わると白いタオルと小さな石鹸が渡され浴場へ入りました。始めに消毒槽へ浸かりその後、大浴槽に浸かりましたが、これが日本の風呂なんだと納得をしました。風呂から上がると、タオルに石鹸を泡立て、ナホトカの以来の垢を洗い流したのでした。

出口専用へ出ますと、白いパンツとジュバンが支給され、さっぱりとした

気分にしてはくれましたが、元の服装になったものの途中でＤＤＴが散布され徹底した防疫体制はこれで終わったのでした。上陸初日の行事はこれで終わり、我々の一団もやっと畳敷きの部屋に落ち着くことができたのでした。「ゴ行」の者と将校班が同室になりました。帰郷出来るまで二、三日は滞在のようでした。寝具は毛布一枚と枕だけでしたが、食事は一日三食、米飯に味噌汁、副食もついており、そこには日本の味と畳の生活がよみがえっていたのでした。



参考資料：引き上げ証明書

翌日昼前には、復員手続きが終わり「引き揚げ証明書」が交付されました。三年もの間、宙になっていた身分もこの証明書交付により、再び戸籍の復活が出来ましたので安堵しています。

午後になって物資の支給が始まったのです。引き揚げ者の男たちが行列になって押しかけていますから、援護局の係員も、衣類だ、靴だと無造作に放り投げています。おしまいには毛布にくるんで部屋へ帰ったくらいでした。

一夜が明けて爽やかな朝を迎えます。今日は戦後未支給給与が支払われます。三年間の兵隊給料一、三五〇円となっていました。一時金五〇〇円、帰郷旅費四五〇円。合計九五〇円。残金は広島県世話課より支給されると言われていました。四、五軒のテントを張った店の中に眼鏡店を見つけ、眼鏡のレンズがひび割れで不自由しておりましたので新調し四〇〇円は支払ったと思います。手にした金の半分近く使っています。食べ物を見れば欲しくなる、甘い餡の入った蒸しパンを口にしながら味わっていました。散髪券が渡されました。まさか散髪までして帰ってくるとは思っていなかったでしょう。

電報が、一通無料でしたから、福山市三吉町、母宛に打っておきました。

「一六ヒ二三ジ五九フクヤマツクセイジ」

一五日の午後は帰郷準備で部屋は忙しそうにしています。僕も支給品を毛布で梱包して紐を手に入れ荷造りが終わる。

「福山駅　郡さん」乗車券を渡されました。明日はいよいよ舞鶴を離れる日になりました。

一〇月十六日、上陸以来の好天に恵まれ援護局事務所前で、関東、山陽、九州方面別にトラックに分乗し東舞鶴駅へ送られました。ひとまず、山陰本線経由で京都駅に到着、ここで昼弁当をもらって東海道線へ移動、山陽の者は最後部の車両へ乗り込み弁当を食す。大阪駅に停車、既に薄暮でした。大阪は思い出の一杯詰まった街でしたが…

姫路駅で二人が降車、ここから岡山まで長い区間です。岡山駅でも降車があったと思うが良く覚えていません。岡山駅を出ると、背広を着た青年が、「郡さん、いませんか？」と探しに入ってきたのです。「福山市からお迎えに来ました。」なんと嬉しかったことか。福山市の世話係にいる宝諸さんに三吉町周辺の状況を聞いてみる。どうやら焼失を免れているらしい。先ずは安心でした。話は尽きぬ内に、列車は定刻に福山駅に停車しましたが、最後尾の車両はホームがありません。降車は僕一人でした。デッキから飛び降りようとしていると、暗闇の中から、坂本の叔父の声だ「誠司」と呼ばれ「はい」と言った時、叔父は目の前に来ていました。

ホームから改札を出ましたら、母と妹二人が待ち受けていたのです。

「ただ今、帰りました。」「お帰り！よう帰ったなあ」

母の喜びの声、妹二人も「お帰り、おかえり」母と妹は大阪で被災し、僕はシベリヤから帰り、手を取り合って再会を喜んだ。感動のドラマ、郡誠司の復員がやっと叶った日でした。長編に亘り、ご愛読いただき有難うございました。

編集後記

この間まで咲き誇っていた桜も終わり、すっかり周りの木々の緑に埋もれてしまいました。一年中で一番良い気候になりました。

昨年の八月、第八号に第一回目を掲載しました郡さんの「シベリヤに送られて」が今回で終了しました。長い間のご愛読、執筆をありがとうございました。

皆様の、子供の頃の思い出や、詩、短歌、故郷自慢などお寄せいただきたくお願いいたします。

河村